

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXXII)¹—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： ナーラダ，運命論，行為の果報，ヨーガ，シュカの天空飛翔

[316 章] (B.329 章, C.12422-12481, K.337 章) シュカの生涯 (8) ナーラダの教示による
ヴェーダ学習と解脱

ビーシュマは言った。

- (1) この (ヴィヤーサが) いなくなった時²，ヴェーダ学習に専念するシュカのところに，
もろもろの望まれるヴェーダの意味を話すために³，ナーラダ仙がやってきた。
- (2) シュカは，神仙ナーラダが近づいて来るのを見て，ヴェーダに述べられた歓待の水
に始まる⁴儀礼によって敬意を表した。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXXII)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 10 号 (本号)) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Böhlingk[1863]: Otto Böhlingk, Indische Sprüche, 1863; Reprint Osnabrück 1966.
- Hopkins[1889]: E.W. Hopkins, The Social and Military Position of the Ruling Caste in Ancient India, As Represented By The Sanskrit Epic, JAOS vol.13, 1889, pp.57-374. (Published as a monograph at New Haven Conn. in 1889.)
- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata, JAOS vol.23, 1902, pp.109-155.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS vol.24, 1903, pp.7-56.
- Hopkins[1910]: E.W.Hopkins, *Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic*, JAOS vol.30, 1910, pp.347-374.
- Strauss[1912]: Otto Strauss, *Ethische Probleme aus dem "Mahābhārata"*, Tipografia Galileiana, Firenze, 1912.
- Haas[1922]: George C.O.Haas, *Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā*, JAOS vol.42, 1922, pp.1-43.
- 上村 [2002]: 上村勝彦「原典訳マハーバーラタ 4」ちくま学芸文庫 2002 年。
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, *Grammar of Epic Sanskrit*, (Indian Philology and South Asian Studies 5) Berlin 2003.
- Hara[2010]: HARA Minoru, *Mṛtyu –The Hindu Concept of Death–*, Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No.68, Tokyo, 2010, pp.95-141.
- 原 [2012]: 原 實 『川』 超域アジア研究報告第 8 号，2012, pp.27-44.

²P.,B.: etasminn antare sūnye K. etasminn antare bhūte Cf.Hopkins[Great Epic]: *etasminn antare sūnye*, Parallel Phrases in the Two Epics, No.30, p.406.16.

³P. vedārthān vaktum īpsitān B.,K.: vedārthān praṣṭum īpsayā

⁴P.,K.: arghyapūrveṇa B. arghapūrveṇa

- (3) すると喜んだナーラダは歡喜して言った。「ヴェーダを知る者たちの中で最もすぐれた者よ¹，言いなさい。親愛なる者よ²，私はどうすれば君を幸福に結びつけられようか。」
- (4) ナーラダの言葉を聞いて，シュカは言った，パーラタ族の者よ。「この世界で幸福であるものに (hitam yat syāt)，私を結びつけて下さい。」

ナーラダ仙は言った。

- (5) 尊者サナトクマールはかつて，真理を知らんとする清らかな心の (bhāvitātman) 聖仙たちに対して，次の言葉を語った。
- (6) 学問に比すべき目はなく，学問に比すべき苦行は³ない。執着に比すべき苦はなく，棄却に比すべき楽はない。(Cf.MBh.XII.169.33; Dhammapada 202)
- (7) 悪しき行為を控えること，常に善を行うこと，善く振舞うこと，礼儀正しく振舞うこと (samudācārah)，これが無上の幸福である。
- (8) 人間の苦 (asukha) を得て，執着する者は迷い，苦を脱することはできない。執着こそが⁴苦の特徴である。
- (9) 執着ある者の心 (buddhi 意識) は，迷妄の網 (mohajāla) の中で大きくなり，安定しない。迷妄の網に覆われて，この世でもあの世でも苦を得るのである。
- (10) 幸福を求める者は，あらゆる手段を用いて，愛欲と怒りの抑制が為されるべきである⁵。この両者は幸福を妨げるために設けられているのであるから。(Cf.MBh.III.203.39ab, XII.182.9ab)
- (11) 常に苦行を怒りから守るべし。幸運 (śrī) を嫉妬から守るべし。学問を高慢と軽侮から，自己を放逸から (守るべし)。(Cf.MBh.III.203.40, XII.182.10; Böhtlingk[1863]: No.3709)
- (12) 慈悲 (ānṛśamsya) は最高のダルマである。忍耐は最高の力である。アートマンの知識は最高の知識である。真実より優れたものはない。(Cf.MBh.III.203.41)
- (13) 真実の言葉は幸福 (śreyas) である。真実からも幸福 (hita) となるであろう。生き物の究極的な幸福であるもの，それが真実である，というのが私の考えである。(Cf.MBh.III.203.42)

¹P.,K.: brahmaidām vara B. dharmabhṛtām vara

²P. tāta B.,K.: vatsa

³P. vidyāsamaṁ tapaḥ B.,K.: satyasamaṁ tapaḥ MBh.XII.169.33 vidyāsamaṁ balam

⁴P. saṅgo vai B.,K.: saṁyogo Cf.Hopkins[1901]: *saṁyoga* may be a “sign of ill”, if the ‘union’ is with the objective world, p.365.22.

⁵vinigrahaḥ kāryaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: freer use of this unit-verse, *vinigrahaḥ*(b 句末尾) *kāryaḥ*(c 句冒頭) , bc 句で意味がつながる例, p.196.25.

- (14) あらゆる活動の結果を捨てる者¹、願望なき者、受納なき者、一切を捨てる者は、知者であり、賢者である (paṇḍitah)。 (Cf.MBh.III.203.43, VI.26.19(BhG.4.19), XII.182.11)
- (15) この世界で、アートマンによって支配されたもろもろの感官によって、もろもろの感官の対象に対して執着なく向かい (carati)、静まった本性をもち、心動かさず、集中した人、 (cf.MBh.VI.24.64(BhG.2.64))
- (16) 自分に属するものたち (諸感官) を伴っていても、いなくとも、(自分は) それ (感官) ではない (と認識した) 人は²、(それら感官から) 解放され (vimuktaḥ)、遠からず最高の幸福に至るであろう³。
- (17) 常に人々と共に (bhūtaiḥ saha)、見ることもなく、触れることもなく、話すこともなければ、聖者よ、その人は、最高の幸福を得るであろう。
- (18) あらゆる生き物たちを殺すなかれ。慈しみをもって振舞うべし⁴。この世に誕生した後は、誰とも争いをしてはならぬ。 (Cf.MBh.III.203.45, XII.269.5)
- (19) 無所有、満足、無関心、不動。自己を知り、自己を制した者にとって、これが最高の幸福であると言われている。 (Cf.MBh.III.203.46ab)
- (20) 持ち物 (parigraha) を捨て、感官を制御していよ、親愛なる者よ。この世でもあの世でも、無憂の、そして無畏の境地に立つべし⁵。 (Cf.MBh.III.203.47, XII.182.13)
- (21) 願望なき人々は嘆かない。この世での自己の願望を捨てよ⁶。願望を捨てた後に、友よ、汝は苦しみの熱から解放されるであろう。

¹P. sarvārambhaphalatyāgī B.,K.: sarvārambhapharityāgī

²ātmaḥbhūtaiḥ atadbhūtaiḥ saha caiva vinaiva ca Cn. atadbhūtaiḥ, dehādītādātmyaṃ bādhitvā kevalībhūtaiḥ / (atadbhūtaiḥとは、身体などとの同一性を否定し、唯一者となった者は、という意味である)

Cs. ātmabhūtaiḥ svavyatirekeṇāvidyamānair indriyaiḥ, madvyatirekeṇa na santīndriyāṇīti cintayadbhīḥ, svayam atadbhūtaiḥ indriyebhyo vyatiriktaḥ / (ātmaḥbhūtaiḥとは、アートマンなしには存在しない感官たちと、すなわち、「私なしには感官たちは存在しない」と考える者たち (感官?) と、本来 atadbhūtaiḥとは、感官たちとは異なる者は、という意味である)

Cv. ātmabhūtaiḥ, ātmanaḥ bhūtaiḥ jñātaiḥ, putramitrakalatrādībhīḥ, ātmādhīnair iti yāvat / atadbhūtaiḥ, teṣāṃ bhūto na bhavaty atadbhūtaiḥ, tada[na]dhīna ity arthaḥ / (ātmaḥbhūtaiḥとは、自分の、bhūtaiḥ、すなわち、息子・友人・妻などという、知人たちによって、すなわち、自分の眷属たちによって、という意味である。atadbhūtaiḥとは、彼らの bhūtaiḥ、存在が、ない、ということが、atadbhūtaiḥであり、すなわち、彼らに依存しない者、という意味である)

Cs. sahaiva jāgradavasthāyām indriyaiḥ sahaiva carati / svāpavasthāyām vinaivendriyaiḥ carati sa vimuktaḥ / (目が醒めている状態では、感官たちと共に行動し、睡眠の状態では、感官たちなしに行動する者、その者は解脱する、という意味である)

³P.,K.: paraṃ śreyo nacireṇādhigacchati B. paraṃ śreyo na cireṇādhitīṣṭhati Cf.Oberlies[Grammar]: nacireṇa, na-compounds, p.360.4.

⁴maitrāyaṇagataś caret Cf.MBh.III.203.45ab, XII.154.27cd, 182.12ab, 269.5ab; Hopkins[Great Epic]: maitrāyaṇagataś caret, a hidden reference to its source (Maitrāyaṇa Upaniṣad), p.43.27, fn.1.

⁵ātiṣṭha iha Sandhi irregular, Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2 Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.1.-*alā ilī*, p.7.2

⁶P. tyajehāmiṣam B.,K.: tyajed āmiṣam Cs.āmiṣam, viṣayarūpam / (āmiṣamとは、対象という姿をとった (願望) である)

- (22) 苦行を常とし、温和にして、自己を抑制した聖者 (muni) は、征服されないものの征服を望んで、もろもろの執着の対象に執着せずにあるすべし。(Cf.MBh.III.203.48, XII.182.14)
- (23) もろもろの個人的美德には (guṇasaṅga) 執着せず、常に単独の行為を喜びバラモンは¹やがて²この上なき安楽を得るであろう。
- (24) 生き物たちが対であることを喜び中で³、聖者は一人であることを喜び。彼を知恵 (prajñāna) に満足した者と知るべし。知恵 (jñāna) に満足した者は悲しまない。(Cf.MBh.XII.318.43)
- (25) 人は、もろもろの善業によって神格を得、もろもろの混合した業によって人間の誕生を得る (labhati)。抑制なき者は、もろもろの悪業によって獣への誕生 (adhojanma) を得るのである (labhate)。
- (26) この時 (tatra)、生き物は、いつも死と老の苦に襲われ、輪廻の中で焼かれている (pacyate)。汝はどうしてこのことに気づかないのか。
- (27) 汝は、不幸を幸福と見なし、永遠でないものを永遠と見なし、益なきものを有益と見なししている。汝はどうして(このことに)気づかないのか。
- (28) 自分から生じたたくさんの迷妄の糸によって⁴覆われて、あたかも繭のように自分を⁵覆いながら、汝は(そのことに)気づかないのである。
- (29) この世では所有 (parigraha) することなかれ。所有には欠点がある。なぜならば、繭をつくる蚕は、自分の持ち物によって束縛されている(ではないか)。
- (30) 人々は、息子・妻・家族に執着して、疲労に沈む (sīdanti)。泥海のごとき湖に (sarahpaṅkāṛṇave) 沈む年老いた野生の象たちのように。(Cf.MBh.XII.461*, lines 13-14⁶)

¹P. brāhmaṇe B.,K.: brāhmaṇo c 句冒頭のこの名詞が単数処格であると、ab 句の単数主格の形容句「もろもろの個人的美德には執着せず、常に単独の行為を喜び」を受ける名詞がなくなってしまう。従って、B.,K. のように単数主格で読むべきであろう。

²P.,K.: nacirād eva B. na cirād eva Cf.Oberlies[Grammar]: *nacirāt*, na-compounds, p.360.3.

³dvandvārāmeṣu bhūteṣu Cf.MBh.XII.318.43ab

⁴P. mohatantubhir ātmajaiḥ B.,K.: mohāt tantubhir ātmajaiḥ Cs. mohatantubhir ātmajaiḥ, antaḥkaraṇa-vikārair ātmadharmatvenāropitaiḥ / (mohatantubhir ātmajaiḥとは、アートマンの性質と誤って考えられた、もろもろの内的感官の変化によって、という意味である)

⁵P. kośakāravād ātmānaṃ B.,K.: kośakāra ivātmānaṃ Cf.Hopkins[Great Epic]: *kośakāra iva*, pararell to *kośa iva vasunā*, Maitrāyaṇī Upa. 3.4, p.36.14.

⁶当該詩節は次のようである。b 句 c 句が異なった読みをしている。

putradāraḥkūṭmeṣu prasaktāḥ sarvamānavāḥ /

śokapaṅkāṛṇave magnā jīṛṇā vanagajā iva /

(あらゆる男たちは、息子・妻・家族に執着して、悲しみの泥海に沈んでいる。年老いた野生の象たちのように。)

- (31) 大きな網にかかって陸に揚げられた魚たちのように、愛情の網にかかってひどく苦しんでいる人々を見よ。
- (32) 家族、息子と妻、身体、もろもろの財の蓄え¹。すべては、他人のものであり、永遠ではない。何が自分のもの (svam) か。善行と悪行である。
- (33) その時には、汝は、すべてを捨てて、汝の意志によらず行かねばならない。なぜ汝は、無価値なものに執着して、価値ある財産を (svam) 求めないのか²。
- (34) 休息する所もなく (aviśrāntam)、避難する所もなく (anālmbam)、食糧もなく、案内人もいない、暗闇の森の道を、汝は一人でどのようにして行くのであろうか。
- (35) (他界へと) 出発した汝に後ろからついて行くものは何もないであろう。善業と悪業(だけ)が、進んでいく汝につき従うであろう。
- (36) 学問、祭式、武術³、幅広い知識が、目的のために⁴追求される。そして (tu)、目的を達成したならば (再生から) 解放されるのである。
- (37) 村に住む者の歓喜は、束縛する網である⁵。行い善き人々はこれを切って進み、行い悪しき者たちはこれを切ることはない。(Cf.MBh.XII.169.24, 309.70; Śāṅkara's Bhāṣya on Brh.Upa. 4.5.15; Hopkins[1889]: *grāma*, p.77, fn.*)
- (38) 色を岸とし、心を流れとし、接触を鳥とし、味を急流とし (rasāvahām)、香を泥とし、音声を水とし、天界への至るのに困難な道をもち、
- (39) 忍耐を糧とし⁶、真実からなり⁷、確固としたダルマを綱とし⁸、棄却の風の道を行く急流の川を、認識の舟によって渡るべし⁹。
- (40) ダルマとアダルマを捨てよ。真実と虚偽の両者を捨てよ。真実と虚偽の両者を捨てた後、汝がそれによって捨てる、そのものを捨てよ¹⁰。(Cf.MBh.XII.318.44)

¹P. dravyasaṃcayāḥ B.,K.: saṃcayāś ca ye

²P. svam arthaṃ nānutiṣṭhasi B.,K.: samarthaṃ nānutiṣṭhasi

³P. śāuryaṃ B.,K.: śaucam

⁴arthārtham Cs.(gloss: artho brahmajñānaṃ buddhiśuddhir vā, tadartham) (arthah 目的は、ブラフマンの知識、あるいは、心の浄化であり、そのために、という意味である)

⁵nibandhanī rajjur Cf.Hopkins[1901]: the 'rope' may be a 'tie' instead of a means of salvation, p.365, fn.1.

⁶kṣamāritrām Cn. kṣamā eva aritrāṇi, naucālanadaṇḍāḥ yasyām / (それにとっては、忍耐がもろもろの糧、すなわち舟を動かす棒である、という意味である)

⁷satyamayīm Ganguli: Truth is the ballast that is to steady that boat (p.100.36) Deussen: der Wahrheit als Ballast (p.730,v.39)

⁸P. dharmasthairyavaṭākārām B. dharmasthairyavaṭākārām K. dharmasthairyapadāṅkurām Ca,n,p.(gloss: vaṭākāḥ naukaṣaṇarajjuh) (vaṭākāḥ とは、船を曳く綱である) Cf.Hopkins[1901]: the rope, an essential part of a ship that brings one safely across the river of life, p.365, fn.1.

⁹P. śīghrām buddhināvā nadiṃ taret B.,K.: śīghrām nautāryām tāṃ nadiṃ taret

¹⁰yena tyajasi tam tyaja Ca. tam upāyam api siddhaprayojanatvāt tyaja / (tam, すなわち、手段も、完成のために用いられているのであるから、tyaja 捨てよ、という意味である) Cv. yena saṃsāreṇa tyajasi paralokaṃ tyajasi, tam saṃsāraṃ tyaja / (yena, すなわち、輪廻によって、tyajasi, すなわち、汝は他の世界を捨てる、tam それを、すなわち、輪廻を、tyaja 捨てよ、という意味である)

- (41) 無欲によって¹,ダルマを捨てよ。不殺生によって²アダルマも(捨てよ)。認識によって(buddhyā) 真実と虚偽の両者を(捨てよ)。最高の確信によって³認識を(捨てよ)。
- (42) 骨を柱とし,筋肉によって結びつけられ,肉と血を漆喰とし⁴,皮膚によって覆われ(carmāvanaddham),悪臭をもち,大小便に満ち,(cf.Manu 6.76; Hopkins[Great Epic]: *asthisthūnaṃ* *carmāvanaddham*, pararell to Maitrāyaṇī Upa. 3.4, p.36.12; Haas[1922]: No.586)
- (43) 老いと嘆きに満ち,病気の住居として病み,埃に覆われ,長くはもたない,生き物の家(身体)を捨てよ。(Cf.Manu 6.77; Haas[1922]: No.586)
- (44) 存在し得るこの一切は,すべて動くもの(jagat)と動かぬもの(ajagat)とである。一切は,大きなものであれ,極小のものであれ⁵,大元素を本質としている⁶。
- (45) (上述の要素に加え)五種の感官,そしてタマス,サットヴァ,ラジャスというように,この十七からなる集合は⁷,未顕現(avyakta)と名づけられている。
- (46) ここにすべての顕現・未顕現からなる感官の対象が結びついて,二十五からなるものというのが⁸,この顕現と未顕現からなるグナ(guṇa 性質)⁹である。
- (47) これらすべてが結合したものが,人と呼ばれる。ここ(人)には,三種の目的(trivargo),楽,苦,生,そして死がある。
- (48) これを正しく知る者は,(生き物の)生成消滅を知る者である。パラージャラの孫よ,この世において¹⁰,もろもろの知識の対象は何であっても(jñānānāṃ yac ca kiṃcana)認識すべきである。

¹asaṃkalpād Ca. asaṃkalpāt, akāmanayā / (asaṃkalpāt とは,無欲によって,という意味である)

²P. ahimsayā B.,K.: alipsayā

³paramaniścayāt Cs. paramaniścayāt, paramātmaivāham iti niścayāt / (paramaniścayāt とは,私が最高我に他ならない,という確信によって,という意味である)

⁴māṃsaṣoṇitalepanam Cf.Hopkins[Great Epic]: phrases common not only to the two epics but to outside literature, *māṃsaṣoṇitalepanam*, Dhammapada 150, Manu 6.76, MBh.316.42, Maitrāyaṇī Upa. iii.4, p.69.3.

⁵P. mahad yat paramāṇu yat B. mahad yat paramāśrayāt K. mahad yat paramāṇu ca

⁶K. は,この詩節の後に次の行を挿入している。(=MBh.XII.794*)

mahābhūtāni khaṃ vāyur agnir āpas tathā mahī /
 ṣaṣṭhaṃ tu cetanā yā tu ātmā saptamam ucyate /
 aṣṭamaṃ tu mano jñeyam buddhis tu navamī smṛtā //

(虚空・風・火・水たち・地が大元素たちである。六番目は知,アートマンは七番目と言われる。八番目は思惟と知られるべし。九番目は統覚と伝えられている。)

⁷saptadaśako rāśir Cn. pañca bhūtāni, mahadbuddhiḥ, indriyāṇi pañca, cakārāt pañca prāṇāḥ, tama āditrayam ekam, ity saptadaśakaḥ / (五種の元素,大である統覚,五種の感官,caの語によって,五種の氣息,タマスを最初とする三種からなる一組,というように十七からなる)

⁸P. pañcaviṃśaka ity B.,K.: caturviṃśaka ity Cf.Hopkins[Great Epic]: making the category of twenty-four, p.34, fn.1.

⁹P. guṇaḥ B.,K.: gaṇaḥ

¹⁰P. pārāśaryeha B. pāramparyeṇa K. pāramparyeha

- (49) 何であっても諸感官によって捉えられるものは、「顕現したもの (vyakta)」であると定まっている。感官を超えており、証相によって捉えられるものは¹、「未顕現のもの (avyakta)」と知られるべし。(Cf.MBh.III.202.11, XII.182.15)
- (50) 人 (dehin) は、諸感官が制御されることによって、にわか雨によって喜ぶかのごとく、喜ぶ。そして、アートマンが世界に広がっているのを見、アートマンの中に世界を²見るのである。
- (51) 常に (アートマンの中に) あらゆる状態におけるあらゆる生き物を見つつ、最高我を見る者の³力は、知識の限界を見ない⁴。
- (52) 迷妄より生じた種々の汚れを、知識によって超えて、ブラフマンとなった者には (brahmabhūtasya)、悪しきものとの結合は生じない。世間における認識の光によって、世間的慣習が傷つけられることはない。
- (53) 道を知る尊者は、アートマンの中にいる無始無終の⁵不変の人 (jantu) を、無形の非行為者であると⁶言った。
- (54) しかし、自ら為したあれこれの行為によって常に苦しむ人は (jantuh)、苦を止めるために、何度も生き物たちを (jantūn) 害するのである。
- (55) そのため、他の新たな多くの行為を受け取るのである。そして再び、それによって苦しむのである。あたかも病人が、有害なものを食べて (苦しむか) のように。
- (56) 絶えず迷妄によって苦しみ、諸苦を楽と意識する者は、束縛され、そして常に、攪拌棒 (によって) のように、もろもろの行為によってかき混ぜられるのである。
- (57) それ (攪拌) が停止すると (?), 自らの束縛から⁷この世でもろもろの行為が発生するので、多くの苦痛を伴って、円盤のごとく輪廻の世界を廻るのである。
- (58) しかし、汝は、束縛を停止し、行為も停止している。一切知者であり、一切に勝利した汝は、世間的事物を離れた (bhāvavivarjitah)、完成者であるべし。

¹liṅagrāhyam atīndriyam Cs. liṅagrāhyam, anumeyam / (liṅagrāhyam とは、推理の対象は、という意味である) Hopkins[Great Epic]: comprehended only by the “fine organs” (liṅgākhyam atīndriyam), p.34, fn.1.

²P. lokam ca B.,K.: lokāṁś ca

³parāvaradṛṣaḥ Cs. parāvaradṛṣaḥ, paraḥ hiranyagarbhaḥ, avaraḥ nikṛṣṭaḥ, yasminn asau parāvaraḥ, paramātmā / (parāvaradṛṣaḥ)について。paraḥとは、ヒラニヤガルバであり、avaraḥとは、下層民である。ある者にこれがある、というのが parāvaraḥであり、それは最高我である)

⁴P. śaktir jñānavelāṁ na paśyati B.,K.: śaktir jñānamūlā na naśyati

⁵P.,B.: anādinidhanaṁ jantum K. anādinidhanajñāṁ tam

⁶akartāram amūrtaṁ Cv. akartāram, svātantryeṇa kartṛtvaśaktirahitam / (akartāram とは、独立性のために、行為者性という力を欠いている者と、という意味である)

⁷P. tato nivṛtto bandhāt svāt B.,K.: tato nibaddhaḥ svām yoniṁ

- (59) 多くの人々が、苦行の力による(心の)統御によって¹新しい束縛を避け、束縛のない、安楽を生ずる完成 (siddhi) に到達したのである。

[317 章] (B.330 章, C.12482-12511, K.338 章) シュカの生涯 (9) ナーラダの教説 (2)

ナーラダは言った。

- (1) 憂いを滅するために、憂いなく²、平安をもたらす、よき聖典を (śāstram) 学んで、認識 (buddhi) を獲得し、その認識を得た後、安楽は増大するのである。
- (2) 千の憂いの原因、百の恐れの原因が、日ごとに、愚かな者に入る。しかし、賢者には入らない。(Cf.MBh.III.2.15, XI.2.13, XII.26.20, 168.31; Hitopadeśa 1.2)
- (3) それゆえ、望ましくないことを滅するために、余の物語を聞くがよい。心 (buddhi) が支配下におかれるならば、憂いの滅を得るであろう。
- (4) 好まぬ者と交わるが故、そして好ましい者と別れるが故に、知恵少ない人々は、もろもろの精神的苦しみ (mānasair duḥkhair) と結びつくのである³。(Cf.MBh.III.206.16)
- (5) 過ぎ去った事々における (dravyeṣu) もろもろの美点 (guṇāḥ) を思うべきではない。それらに近づかない者には⁴、愛着 (sneha) の束縛は解かれるであろう。
- (6) 貪欲 (rāga) がはたらくところでは、(それを) 欠点と見る者となるべし。幸福を望ましくないもののごとく見るべし⁵。そうすればすぐに無関心となろう (virajyate)。
- (7) 過ぎ去ったものを嘆く者には、利益もなく、ダルマもなく、名声もない。一旦存在しなくなったものは、(再び) 戻ることはないのである。(Cf.MBh.XI.2.16cd)
- (8) すべての生き物は、いくつかのよい点と (guṇair) 結びついたり、離れたりしている。それ故、憂いの原因は、一人にだけあるのではない。(Cf.MBh.III.206.17)
- (9) 死んだのであれ、滅したのであれ、去ったものを嘆く者は、苦によって苦を得るのである。二つの悪しきことを⁶得るのである。(Cf.MBh.XI.26.4, XII.16.10)

¹saṃyamena Cn. saṃyamena, dhāraṇādhyānasamādhyātmakena / navam dr̥ṣṭimātreṇa utpannam / (saṃyamena とは、凝念・禅定・三昧によって、という意味である。navam とは、見のみによって生じた、という意味である)

²aśokaṃ Cs. aśokaṃ, śokanivartakajñānanakam / (aśokaṃ とは、憂いを滅する認識を引き起こす、という意味である)

³yujyante alpabuddhayaḥ Sandhi irregular: yujyante alpa- Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.4 Absence of udgrāha-sandhi, p.16.13.

⁴P. tān anādiryamāṇasya B.,K.: na tān ādiryamāṇasya

⁵P.,K.: aniṣṭavad dhitaṃ paśyet B. aniṣṭavardhitaṃ paśyet

⁶dvāv anarthau Cn. dvāv anarthau, iṣṭarūpādehavināśaḥ svaśariiratāpaś ca / (dvāv anarthau とは、よい色などをした身体の消滅と自分の身体の苦痛である)

- (10) もろもろの世界における流れ (santati) を、知恵 (buddhi) によって見る者たちは涙を流さない。一切を正しく観察する者には、涙の行為は生じない。
- (11) 身体的あるいは精神的な激しい苦しみに襲われた時、(取り除く) 努力ができないことに思い悩むべきではない (nānucintayet)。 (Cf.MBh.XII.540*, lines 1-2)
- (12) このように、思い悩むべきではないということが、苦に対する薬である。なぜなら (苦は) 思い悩んでいる人を離れることはなく、さらにまた大きくなるからである。 (Cf.MBh.XI.2.17cdef, XII.540*, lines 3-4)
- (13) 英知によって精神的な苦しみを、もろもろの薬草によって身体的な苦しみを除くべきである。これこそが知識の力である (etad vijñānasāmarthyam)。愚か者たちと同じになつてはならない。 (Cf.MBh.III.206.15, XI.2.21, XII.540*, lines 5-6)
- (14) 若さは移ろい行く。容姿、寿命、富の蓄積、健康、愛人との同居¹(も移ろい行く)。賢者はこれらを求めてはならない。 (Cf.MBh.III.2.45, XI.2.15, XII.540*, lines 7-8)
- (15) この世の苦しみを²一人で悲しむべきではない。もし救済策を見つけたならば、嘆くことなく、対抗すべし。 (Cf.MBh.XI.2.16ab,17ab, XII.540*, lines 9-10)
- (16) 人生においては楽よりも苦が多い。この点について疑いはない。そして (人は)、迷妄によって、もろもろの感官の対象に執着し、死が好まれることはない³。(この点について疑いはない。) (Cf.MBh.XII.540*, lines 11-12)
- (17) 苦と楽を両者とも捨てる人は、究極的なブラフマンに至る。賢者たちは、その人 (の死) を悲しむことはない。 (Cf.MBh.III.206.19ab, XII.540*, lines 13-14)
- (18) もろもろの財産は、捨てるのも苦しく、守るのも楽ではなく、獲得するのも苦勞である。 (人は) そのような財産がなくなることを心配すべきではない。 (Cf.MBh.III.2.43, XII.540*, lines 15-16)
- (19) 相次いで (anyām anyām) 見事な財産の状態に達した後、満足しない人々は、破滅に赴く。一方、賢者たちは満足に赴くのである。 (Cf.MBh.XI.2.20)
- (20) すべての蓄積は、消滅で終り、すべての上昇は落下で終る。すべての出会いは離別で終り⁴、命は死で終るのである。 (Cf.MBh.XI.2.3, XII.27.39, XIV.44.18: Rāmāyaṇa 2.105.16, 7.52.11)⁵

¹P.,B.: priyasamvāso K. priyasamsargo

²jānapadikaṃ duḥkham Cs. jānapadikaṃ, sarvasādhāraṇaṃ saṃsāraduḥkham / (jānapadikaṃ とは、すべての共通な輪廻の苦しみを、という意味である)

³mohān maraṇam apriyam Cs. mohān maraṇam apriyam, punarjātiśatena tatsādhanārthe yatnaṃ kurvantī bhāvaḥ / (mohān maraṇam apriyam とは、百回の再生によってそれを達成するために努力をする、という意味である)

⁴saṃyogā viprayogāntā(ḥ Cf.Hopkins[1901]: *saṃyoga*, "sign of ill", p.365, fn.1.

⁵P. の Critical Apparatus は、他に、Gobhila Smṛti 3.43, Kathāsartisaṅgāra 51.26cd-27ab, Divyāvadāna (Cowell) p.27, の参照を指示している。

- (21) 渴望には終りはない。満足が最高の安楽である。それゆえ賢者たちは、満足のみをこの世での財産と見るのである。(Cf.MBh.III.2.44)
- (22) 瞬きの間さえも、生命 (vayas) は過ぎ行き、留まることはない。もろもろの自分の身体が無常である時、何を永遠と考えるべきであろうか。
- (23) 最高の境地を見る者たちは、もろもろの生き物にある消滅を¹考察し、暗闇を超えるものを²認識して、(死の)道を行く時でも悲しむことはない。(Cf.MBh.III.206.20cd, 25)
- (24) 死は、もろもろの欲望に満足することなく、富の蓄積のみに意を注ぐ者を (saṃcinvānakam) , 虎が家畜に近づいて(奪い去る)がごとく、奪って去るのである。(Cf.MBh.XII.169.18, 309.19; Hara[2010]: Mṛtyu's mercilessness, p.137, fn.29)
- (25) さて苦の解放のための手段も見よ。悲しむことなく行為せよ。心を集中し、悪行を離れていよ。
- (26) 音声、接触、色、もろもろの香り、もろもろの味には、富者にとっても貧者にとっても、享受した後は何もないのである。
- (27) (対象と) 結びつく以前には、生き物たちには苦は存在せず、病気もなかった³。あらゆるものは分離するのであるから、本性に留まって (prakṛtisthitah) , 悲しむべきではない。(Cf.XII.317.20c)
- (28) 堅忍によって男根と腹を守り、目によって手足を守るべし。心 (manas) によって目と耳を守り、学問によって心と言葉を守るべし。(Cf.MBh.XII.232.6)
- (29) 親しい人々にも⁴、他の人々にも、愛情を捨てて、謙虚に振る舞うべきである。その者は、安楽をもつ者であり、その者は賢者である。
- (30) アートマンの追究を喜びとし⁵、座り⁶、他に依存せず、願望なく、アートマンのみを同伴者として行くならば、その者は安楽をもつ者となるう。

[318章] (B.331章, C.12512-12576, K.339章) シュカの生涯 (10) ナーラダの教説 (3)(運命論) とシュカの決意

ナーラダ仙は言った。

¹P. bhūteṣv abhāvaṃ B.,K.: bhūteṣu bhāvaṃ

²P. tamaṣaḥ param B.,K.: manasaḥ param

³P. nāsti duḥkham anāmayam B.,K.: nāsti duḥkham parāyaṇam

⁴P.,B.: saṃstuteṣv K. sasniḡdheṣv

⁵adhyātmaratiḥ Hopkins[Great Epic]: *adhyātma*, used as a noun in the sense of metaphysics, p.132, fn.1.

⁶āsīno Cs. āsīnaḥ, brahmasamīpasthaḥ, brahmabhūta ity arthaḥ / (āsīnaḥとは、ブラフマンの近くにいる、すなわち、ブラフマンになった、という意味である)

- (1) 楽と苦の錯誤が¹生じる時には、英知も智慧も、そして勇敢さも、この(錯誤をもつ)者を²救うことはできない。(Cf.MBh.III.200.7)
- (2) 自ら³努力すべし。努力する者は滅しない。老・死・病から、愛しいアートマンを救うべし。
- (3) もろもろの身体的・精神的病気は、剛弓の射手たちによって射られた鋭利な先端をもつもろもろの矢のように、もろもろの身体を破壊するのである。
- (4) 病気になる⁴と、もろもろの知りたい欲求によって怯えつつ⁵、命を望んでも、意に反して、身体は滅へと引きづられていくのである。
- (5) もろもろの川の流れるように、夜と昼は、人々の命をくりかえし奪って、流れて戻らないのである。(Cf.Böhtlingk[1863]: 6338, 7264; 原 [2012]: 往きて復らぬ川, p.39.23)
- (6) この月の満ちる半月と欠ける半月の変化は⁶、生まれた人を必ず老いさせ、一瞬も留まらないのである。
- (7) この不老の太陽は、生き物たちのもろもろの楽と苦を老いさせつつ、何度も沈んではまた昇るのである。
- (8) もろもろの夜は、不可見のものに基づいた⁷、予期されない、人々にとって望ましい、あるいは望ましくない、もろもろの状態 (bhāvān) を奪って、消えるのである。
- (9) もし人の行為の果報は他に依存するのでなければ、人は、願望に従って望む、もろもろの願望の一つ一つを得るであろう⁸。(Cf.MBh.III.200.8)
- (10) しかし、自制した、能力があり思慮ある人々でも、自分のもろもろの行為が失敗したために、果報を得られずにいるのが見られる。(Cf.MBh.III.200.9)

¹sukhaduḥkhaviparyāso Cn. viparyāsaḥ, sukhe duḥkhadhīḥ, duḥkhe sukhadhīḥ / (viparyāsaḥとは、楽において苦を認識し、苦において楽を認識するが、という意味である) Cs. sukhe, mokṣe duḥkhatvabhṛāntiḥ, duḥkhe, saṃsāre sukhatvabhṛāntiḥ / (sukhe, すなわち、解脱において、苦であると錯誤し、duḥkhe, すなわち、輪廻において、楽であると錯誤することである) 上村 [2002]: 幸不幸が転変する時 (p.109.10)

²enam この語が何を指すか明確ではない。パラレルである MBh.III.200.7 は三行詩となっていて、ab 句として、mūḍho naikṛtikāś cāpi capalāś ca dvijottama / の一行があり、この後に本詩節二行が cdef 句として続いている。従って、この場合には、enam は、愚か者 (mūḍha)、不正直な者たち (naikṛtika)、不思慮な者 (capala) を指すと解される。

³svabhāvāt Cs. svabhāvāt, parapreraṇam antareṇa / (svabhāvāt とは、他者からの命令なしに、という意味である)

⁴P. vyādhitasya B.,K.: vyathitasya

⁵P. vivitsābhis trasyato B. vidhitasābhis tāmyato K. vidhitasābhis trasyato

⁶vyatyayo Cn. vyatyayaḥ, paurvāparyam / (vyatyayaḥとは、連続である)

⁷adr̥ṣṭapūrvān Cs. adr̥ṣṭam, karma / tatpūrvān karmajanyān / (adr̥ṣṭam とは、行為であり、tatpūrvān とは、もろもろの行為によって生じる、という意味である)

⁸P. yo yam icched yathākāmaṃ kāmānāṃ tat tad āpnuyāt B. yo 'yam icched yathākāmaṃ kāmānāṃ tad avāpnuyāt K. yo yad icched yathākāmaṃ ayatnāc ca tad āpnuyāt /

- (11) 他方、愚かで徳のない、劣った人々であっても、もろもろの願望をもっていないの
に¹、あらゆる願望を満たしているのが見られる。
- (12) 他に、生き物たちの殺害や世人の詐欺に常々従事する者が、もろもろの安楽の中でのみ老いてゆく。(Cf.MBh.III.200.10)
- (13) 行為せず座っている者に、幸運の女神は近づく²。他のある者は、行為に従事しても、目標に達しない³。(Cf.MBh.III.200.11)
- (14) (このことを)人間の本性に基づく罪過 (aparādha) と見よ。あるところで生じた精液は、再び別のところに行く。
- (15) その精液が、母胎に付着した時、胎児が生じる場合もあり、生じない場合もある。その(精液の)無活動は⁴、(実を結ばない)マンゴーの花のごとくに、理解される。
- (16) 息子を望み、子孫を願い、成就にむけて努力しても、ある人々には、胎児は生じない。
- (17) 怒った毒蛇を恐れるように、胎児を恐れる者たちに、長寿の息子が生まれる。どうして彼は死んだ父(が帰ってきたと考えられる)であろうか⁵。
- (18) 息子を熱望する哀れな者たちが、神々を祭り、苦行を行った後、十ヶ月(胎内で)保護されて⁶、家系を台なしにする者たちが生まれるのである。(Cf.MBh.III.200.12)
- (19) ある者たちは、これらの同じよき行為によって (tair eva mañ.galaiḥ)、金銭と穀物、祖先によって蓄積された豊かなもろもろの享楽を獲得する者として生まれる。(Cf.MBh.III.200.13)
- (20) お互いに近寄って、夫婦の交わりをした際に、あたかも災いがやってくるのごとく、胎児が母胎に入る(こともある)。
- (21) 氣息をもつ者たちの氣息が停止すると、(宿っていた)身体が滅し、身体なくなった靈魂は⁷(その身体の)肉と粘液において活動していたのを⁸、

¹P.,B.: āśīrbhir apy asaṃyuktā K. aśubhair api saṃyuktā

²P. upatiṣṭhati B.,K.: upatiṣṭhate

³P. na prāpyam adhigacchati B.,K.: nāprāpyam adhigacchati

⁴P.,B.: yasya nivṛttir K. yasya nirvṛttir

⁵P. kathaṃ pretaḥ pitaiva saḥ B. kathaṃ pretya ivābhavat K. kathaṃ pretaḥ piteva ha

⁶daā māśān paridhṛtā(h) Cf.Hopkins[1903]: birth, said to follow in ten months, p.19.9.

⁷P. śīrṇaṃ paraśarīreṇa nicchavikaṃ śarīriṇaṃ B. śīghraṃ paraśarīrāṇi cchinnaḥ śarīriṇaṃ K. śīrṇaṃ paraśarīrāṇi cchinnaḥ śarīriṇaṃ Cn. paraśarīrāṇi, śarīrāntarāṇi, prāpnvantīti śeṣaḥ / (paraśarīrāṇi とは、もろもろの他の身体を、という意味で、得る、と補われる)

⁸この詩節の意味を Ganguli は次のように述べている。Ganguli: The sense of the verse is that every one, after death, attains to a new body. A creature can never exist without the bonds of the body being attached to him. (p.106, fn.2)

- (22) ある身体と共に焼かれた (靈魂が), 船に (別の) 船が置かれるかのように¹ (その身体) の滅の終りに, 別の滅するものである動不動の身体に移るのを,
- (23) 性的交わりによって, (母の) 腹中におかれた意識なき精液の雫が, どのような努力によって, 命ある胎児となるのかを, 汝はここで見るであろう。
- (24) もろもろの飲食物, そして食べられたもろもろの食物が消化される同じ腹中において, なぜ胎児は, 食物のように消化されないのか。
- (25) 胎児と大小便の道は, 本性として定まっている。(胎児の場合) 保持するか, 放出するかについて, 行為者の意志は存在しない²。
- (26) ある胎児たちは腹から流出する。他の者たちは誕生する。他の胎児たちは (ピシャーチャなどの) 到来とともに³消滅する。
- (27) この母胎との結合から, 生きて解放される者は⁴, なんらかの誕生を得る。そして再びもろもろの (夫婦の) 対の中へと沈むのである。
- (28) 同時に生まれた百人のうち⁵人生の第七段階, 第十段階に達するのは⁶, そのうちの五人である。百歳の寿命をもつ者たちは⁷いない。
- (29) 人間たちにはもろもろの抗う力はないであろう⁸。この点については疑いない。小さな動物たちが猛獣たちによって引き裂かれるかのように, (人間は) もろもろの病気によって引き裂かれるのである⁹。(Cf.MBh.III.200.14)
- (30) もろもろの病気によつて侵食され¹⁰, 多くの財産を失っている人々の苦しみを, 医者たちは, 努力はしても, とり除くことはできないのである。

¹nāvi nāvam ivāhitam Cs. nāvi nāvaṃ, naukāyaṃ naddhā nauḥ / (nāvi nāvam とは, 小舟に結びつけられた船が, という意味である)

²P. na kartur vidyate vaśaḥ B.,K.: na kartā vidyate 'vaśaḥ

³P. āgamaṇa saḥānyeṣāṃ, B.,K.: āgamaṇa tathānyeṣāṃ Cv. anyeṣāṃ, piśācādināṃ matsariṇāṃ vā / (anyeṣāṃ とは, ピシャーチャなどの, あるいは敵どもの, という意味である)

⁴P. yo jīvan pramucyate B. yo bījaṃ parimucyate K. yo jīvaḥ parimucyate

⁵P. śatasya saḥajātasya B.,K.: sa tasya saḥajātasya Cv. saḥajātasya śatasya āyusaḥ / (同時に生まれた百の命のうち, という意味である) Deussen は *sa tasya* を *sutasya* と読んでいる (p.737, v.28)。

⁶P. saptamīṃ daśamīṃ daśām B.,K.: saptamīṃ navamīṃ daśām N. は, 身体の十段階として, (1) garbhavāsa, (2) janma, (3) bālya, (4) kaumāra, (5) paugaṇḍa, (6) yauvana, (7) sthāvīrya, (8) jarā, (9) prānarodha, (10) nāśa を挙げている。(Cf.Hopkins[1902-2]: It is said that after birth one's senses come to the seventh and ninth stage, ... and then cease (in the tenth) as one expires, p.355.2)

⁷P.,K.: na bhavanti śatāyusaḥ B. na bhavanti gatāyusaḥ

⁸nābyutthane manuṣyānām yogāḥ syur P.(III.200.14ab') karmajā hi manuṣyāṇām rogā N. yogāḥ sāmartyāni / (yogāḥとは, もろもろの能力は, という意味である)

⁹vyādhibhiś ca vimathyante vyālaiḥ kṣudramṛgā iva Cf.Hopkins[Great Epic]: *vyādhibhiś ca vimathyante vyādhaiḥ (P. vyālaiḥ) kṣudramṛgā iva*, Parallel Phrases in the Two Epics, No.271, p.436.31.

¹⁰P.,K.: bhakṣyamānānām B. mathyamānānām

- (31) 賢明で¹、薬草をもっている熟達した医者たちもまた、もろもろの病気によって苦しめられる。獣たちが獵師たちによって殺されるかのように²。(Cf.MBh.III.200.15)
- (32) 彼らは、種々の煮汁や醍醐を飲んでいても、老齡に破壊されるのが見られる。蛇たちが力ある象たちによって破壊されるかのごとく³。
- (33) 一体誰がこの世で、病気に苦しむ鳥獣たち、野獣たち、貧者たちを治療するであろうか。概して彼らは病まないのである。
- (34) 病気は、恐ろしい⁴、打ち勝ちがたく精力盛んな王たちにさえ近づいて、(彼らを)奪う⁵。家畜の料理人たちが家畜たちを奪うかのように⁶。
- (35) このように世間の人、援助者もなく、迷妄と嘆きに沈み、突然強い流れに投げこまれ、連れ去られるのである。(Cf.MBh.III.200.18)
- (36) 財産によっても、王位によっても、恐ろしい苦行によっても、靈魂たちと結びついたもろもろの本性が離れる⁷ことはない。
- (37) 努力の果報が存在するならば⁸、あらゆる人は、死ぬこともなく、老いることもなく、あらゆる願望を満たすことができ、好まぬものを見ることもないであろう。(Cf.MBh.III.200.19)
- (38) すべての人は、世間の人よりも一層上位になろうと望み⁹、力に応じて努力する。しかし、それはそのようにはならない。(Cf.MBh.III.200.20)
- (39) 権力の高慢に酔った者たちや、酒の酔いに酔った者たちを、酔っていない、信義があり、強く勇気ある人たちが¹⁰敬っている。

¹P.,K.: te cāpi nipuṇā B. te cātinipuṇā

²vyādhibhiḥ parikṣyante mṛgā vyādhair ivārditāḥ P.(III.200.15cd) vyādhayo vinivāryante mṛgā vyādhair iva dvija / (もろもろの病気は駆逐される。獣たちが獵師たちによって狩られるかのように。) Cf.Hopkins[Great Epic]: *mṛgā vyādhair iva 'rditāḥ*, Parallel Phrases in the Two Epics, No.215, p.429.39.

³P. nāgā nāgair ivottamaiḥ B.,K.: nāgā nāgair ivottamaiḥ Ganguli: like trees by strong elephants (p.107.18) *nāgā nāgair* の二つの *nāga* は、同じ動物か。

⁴P.,B.: ghorān api K. paurān api

⁵P. ākramya roga ādate B. ākramyādadate rogāḥ K. ākramya khādante rogāḥ

⁶P. paśūn paśupaco yathā B. paśūn paśugaṇā iva K. paśūn paśupacā iva

⁷P. svabhāvā vyativartante ye niyuktāḥ śārīriṣu B.,K.: svabhāvam ativartante ye niyuktāḥ śārīriṣaḥ

⁸P. utthānasya phalaṃ prati B.,K.: utthānasya phale sati Cs. utthānasya, puruṣakārasya / (utthānasya とは、人の行為の、という意味である) Cv. utthānasya, duṣkarmaṇām utthānasya / (utthānasya とは、悪しき諸行為の、utthānasya 実行の、という意味である) この d 句の部分は、パラレルの MBh.III.200.19 では、*vaśīvam yadi vai bhavet*(もし自由があれば(上村 [2002]: p.110.9))、となっていて、条件が明示されている。

⁹P. sarvo bhavitum icchati B. sarvo gantum samīhate K. sarvo bhavitum ihate (K. 折衷的)

¹⁰P. apramattāḥ śaṭhāḥ krūrā vikrāntāḥ B. apramattāḥ śaṭhāḥ sūrā vikrāntāḥ K. apramattās ca sūrās ca vikrāntāḥ P.,B. の *śaṭhāḥ* では理解できない。Ganguli(p.108, fn.2), Deussen(p.738, v.39) とも *aśaṭhāḥ* と読んでおり、これに従う。K. は、*śaṭhāḥ* を用いず、*ca* を二つ用いて音節数を合わせている。次の P. *krūrāḥ*(無慈悲な)も、B.,K. の *sūrāḥ*(勇敢な)の方がわかりやすい。

- (40) ある人々にとっては、もろもろの煩惱は、気づかれることなく消滅する。他の人々にとっては、それぞれに自分のものは何も近づかない¹。
- (41) (前世の)もろもろの業との結合において、果報の大きな相違が²見られる。ある人々は駕籠をかつぎ、別の人々は駕籠に乗って行く。(Cf.MBh.III.200.21cd, 1025*)
- (42) すべての人々が繁栄を願う中で、ある人々だけが馬車と従者をもつ。百人の妻をもつ男たちがいる³一方で、百人の寡婦がいる⁴。
- (43) 生き物たちが対であることを喜ぶ中で⁵、人々はそれぞれ一人で行くのである。彼我の相違を見よ⁶。この点について迷ってはならない。(Cf.MBh.XII.316.24)
- (44) ダルマとアダルマを捨てよ。真実と虚偽の両者を捨てよ。真実と虚偽の両者を捨てた後、汝がそれによって捨てる、そのものを捨てよ。(Cf.MBh.XII.316.40)
- (45) このように最高の秘密が汝に説かれた、最高の聖仙よ。それによって神々は人間の世界を捨て、天界に行ったのである。

ビーシュマは言った⁷。

- (46) ナーラダの言葉を聞いて、最高の英知をもつ (paramabuddhimān) シュカは、一心に (manasā) 考えたが、賢明な彼も確信に至らなかった。
- (47) 息子と妻たちによって大きな煩惱があり、学問とヴェーダ (の研究) には大きな苦勞がある。一体、煩惱小さく、大きな幸運のある永遠の境地は何であろうか。
- (48) それから少しの間、高きと低きを知る者は⁸、自分の決断したダルマの道を、すなわち、最高の至福の道を思って (次のように自問した。)
- (49) どうすれば私は、苦しむことなく最高の道に行くことができようか。どうすれば再び、母胎の輪廻の大海に⁹戻らないことができようか。

¹P. svaṃ svaṃ ca punar anyeṣāṃ na kiṃcid abhigamyate B. svaṃ svaṃ na punar anyeṣāṃ na kiṃcid adhigamyate K. svaṃsvaṃ na punar anyeṣāṃ na kiṃcid adhigamyate Ganguli: Others there are who are seen to possess no wealth but who are free from misery of every kind (p.108.6) Deussen: bei anderen hingegen ist nichts zu finden, was ihnen eigen wäre (p.738, v.40)

²mahac ca phalavaiṣamyam Cf.Strauss[1912]: die sozialen Unterschiede von Herr und Diener als *phalavaiṣamyam*, p.213(21.5)

³P. manujās ca śatastrīkāḥ B. manuṣyās ca gatastrīkāḥ K. manujās ca gatastrīkāḥ (K. 折衷的)

⁴P. vidhavāḥ B.,K.: vīvidhāḥ

⁵dvandvārāmeṣu bhūteṣu Cf.MBh.XII.316.24ab

⁶P.,K.: idam anyat paraṃ paśya B. idam anyat padaṃ paśya

⁷B.,K. には bhīṣma uvāca の語はない。

⁸parāvarajño Cs. paraḥ paramātmā avaro jīvaḥ, tayor tattvavit / (paraḥとは、最高我であり、avarahとは、個我である。その両者の真実を知る者は、という意味である)

⁹P.,K.: yonisaṃsārasāgare B. yonisaṃkarasāgare

- (50) 私は、そこから再び戻らない最高の状態を望んでいる。あらゆる執着を捨てて、心 (manas) の定まった道を。
- (51) 私は、私のアートマンが寂靜になる所に、私が不動不滅となって永遠に存在する所に、行くであろう。
- (52) しかし、その最高の道にはヨーガなくして到達することはできない。なぜならば、解脱した者には¹もろもろの業による (身体への) 束縛 (avabandha) が生じることはないのだから。
- (53) それ故私は、ヨーガに集中して、(現在の) 住居である身体を捨て、風となって、光の塊である太陽に入るであろう²。
- (54) このような者は、月が神々の集団と共に滅するように、滅に至ることはない。(神々の中で) 震動した者は (kampitah), 地上に落ち、そして再び昇っていくのである。なぜならば月はいつも欠けては再び満ちるからである³。
- (55) しかし太陽は、豊富なもろもろの光によって諸世界を熱する。不滅の円盤は、常にあらゆる方向から活力 (tejas) を受け取るのである。
- (56) それ故私は、輝く熱をもつ太陽に行くことを望む。私はそこに、何者にも征服されることなく、執着なき内的アートマンとともに⁴住むであろう。
- (57) 私は、太陽の住居においてこの体を投げ捨て、打ち勝ちがたい太陽の活力に、聖仙たちと共に入るであろう。
- (58) 私は、木々に、象たちに、山々に、大地に、諸方位に、天に、神・ダーナヴァ・ガンダルヴァたちに、ピシャーチャ・蛇・羅刹たちに、別れの挨拶をしよう。
- (59) もろもろの世界におけるあらゆる生き物に私は入るであろう。この点については疑いはない⁵。あらゆる神々は、聖仙たちと共に、私のヨーガの力 (yogavīrya) を見よ。
- (60) そして、世に知られた聖仙ナーラダに暇を乞い、彼から同意を得た後で、父のところに行った。
- (61) かの聖者シュカは、偉大な聖仙である聖者クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナに挨拶し、右繞した後で、別れの挨拶をした。

¹P. hi muktasya B. hi buddhasya K. vimuktasya

²vāyubhūtaḥ pravekṣyāmi tejorāśiṃ divākaram Cf. Hopkins[Great Epic]: the happiness of a Yogin after death, entering the sun, here not the moon, p.185, fn.2.

³B.,K. はこの後に次の行を挿入している。(=MBh.XII.795*)

necchāmy evaṃ viditvaite hrāsavṛddhī punaḥ punaḥ /

(私は、これらをこのように知って、何度も満ち欠けする者であることを望まない)

⁴P.,K.: niḥsaṅgenāntarātmanā B. niḥsaṅkenāntarātmanā

⁵P. naṣaṃśayaḥ B.,K.: na saṃśayaḥ Cf. Oberlies[Grammar]: na-compounds, p.359.8.

- (62) 偉大な聖仙はシュカのこの言葉を聞いて喜び、再び彼に言った。「おお息子よ、私が、汝を見て (tvadartham) 眼を喜ばせる間、ここに留まるがよい。」(韻律: Upajāti¹)
- (63) しかし、無関心となったシュカは、愛着なく、束縛を脱しており、解脱のみを思い、心を出発へと向けた。優れた再生族は、父を捨てて去った²。

[319 章] (B.332 章, C.12577-12607, K.340 章) シュカの生涯 (11) ヨーガの実修と天空飛翔
ビーシュマは言った。

- (1) ヴィヤーサの息子シュカは、山の背に登って、平坦で、清浄な、草のない場所に座ったのである、パーラタ族の者よ。
- (2) 正しい順序を知る³偉大な聖者は、聖典の通りに、足から始めて四肢において⁴順番に、アートマンを(正しく)保った。
- (3) それから彼は、太陽が昇って間もなく⁵東に顔を向けて、手足を正しく持し、謙遜した様子で (vinītavat) 座った。
- (4) 鳥の群もおらず、音もなく眼に見えるものもない⁶ところで、賢明なヴィヤーサの息子はヨーガを始めた。
- (5) その時彼は、あらゆる執着から抜け出たアートマンを見た。そしてシュカは、太陽を⁷見て、(歓喜して) 笑った。
- (6) 彼は、解脱の道の認識のために、再びヨーガを開始して、偉大なヨーガ行者の王と⁸なって、空を超えた。
- (7) それから、神仙ナーラダを右邊して、自らのヨーガを最高の聖仙(ナーラダ)に語った⁹。
- (8) 「道は見えました。私は進みます。御身に幸いあれかし、苦行に富む方よ。私は、あなたの恩寵によって、望ましい道を行きます、大威厳の方よ。」

¹ed 句は共に、第 3 音節が長音、第 7 音節が長音となっている。

²B.,K. はこの後に次の一行を挿入している。(=MBh.XII.798*)

kailāsaprṣṭhaṃ vipulaṃ siddhasaṃghaniṣevitam /
(完成した修行者集団の住む広大なカイラーサ山の背に向かって)

³kramayogavit Cf.Hopkins[1901]: *yoga* has the meaning of application (of the order), p.361.9, 361, fn.1.

⁴P. pādāt prabhṛtigātreṣu B.,K.: pādaprabhṛtigātreṣu Cs. pādāṅguṣṭam ārabhya sarvaparvasaṃdhiṣu karamaṇa vāyūṃ saṃsthāpya, bhruvor madhyasthāpitaprāṇaḥ / (足の親指から始めて、あらゆる関節に、順次、風をとどめて、肩の中間に氣息をとどめた)

⁵P. nacirodite B.,K.: nācirodite Cf.Oberlies[Grammar]: *na*-compounds, p.359.8.

⁶P.,K.: nāpi darśanam B. nātidarśanam Cs. atidarśnam, viśeṣadarśanam / (atidarśanam とは、特別な景色は、という意味である)

⁷P. bhāskaram B.,K.: tatparam

⁸P. mahāyogīśvaro B.,K.: mahāyogeśvaro Cf.Hopkins[1901]: *mahāyogeśvara*, who thus 'overcome space' (*vihāhas*, p.361.15.

⁹B.,K. は次の詩節の前にśuka uvāca を挿入している

- (9) ドヴァイパーヤナの息子は、ナーラダによって出発を許されたので、挨拶して、再びヨーガを開始し、虚空に入った。
- (10) かの幸運あるヴィヤーサの息子は、カイラーサ山の山の背から上昇して、確信に満ちて (suniścitaḥ) 中空を行き、¹天界に昇った。
- (11) その優れた再生族が、ガルダに等しい輝きを発し、心あるいは風の速さで (mano-mārutaramḥasam)、昇っていくのを、あらゆる生き物たちは見た。
- (12) 彼は、確信をもって²、三界すべてを思いつつ、火や光のごとき輝きをもって、天の道を進んだ。
- (13) 彼が、集中した心をもって (ekamanasam)、動ずることなく、何の恐れもなく進むのを、あらゆる生き物は、動く者たちも他の (動かぬ) 者たちも³、見たのである。
- (14) その時彼らは、力に応じ、規則に従って、(シュカを) 礼拝した。天に住む者たちは、彼に天の花々の雨を降らせた。
- (15) 彼を見て、あらゆるガンダルヴァとアプサラスの群は驚いた。聖仙たちも、成就しているにもかかわらず、非常に驚い(て言っ)た。
- (16) 「苦行によって完成に至り、虚空を行く者は、一体誰だろう。体を下に顔を上にし⁴て⁴、もろもろの視線によって (netraiḥ) 運ばれていく⁵(のは誰だろう)。」
- (17) それから、最高の堅固さを本性とし三界において名を知られた彼シュカは、太陽を見上げつつ、東に向って、無言で去った。(その様子は) あたかも虚空全体をあらゆる方面から一つの音によって満たすかのごとくであった。
- (18) すべてのアプサラスの群は、突然彼が飛んでいるのを見て、心惑い、王よ、大変に驚いて、パンチャチューダーを始め、大きく眼を見開い(て言っ)た。
- (19) 「いかなる神が、このように最高の道を行くのでしょうか。彼は、十分な確信をもって、解脱したかのごとく欲望なく、ここにやって来ます。」
- (20) それからシュカは、ウルヴァシーとプールヴァチッティがいつも訪問するマラヤという名の山を越えた。この両者は梵仙の息子に対して最高の驚嘆に至った。

¹P.,K.: vyāsaputraḥ B. vāyubhūtaḥ

²vyavasāyena Cn. vyavasāyena, sārvaṭmyaniścayena / (vyavasāyena とは、一切のアートマンであるという確信をもって、という意味である)

³P.,K.: jaṅgamānītarāṇi ca B. jaṅgamāni carāṇi ca

⁴adhaskāyordhvavaktraś ca Ca. svargād bhraṣṭocitasyādhovaktratā, yatas tataḥ siddho 'yam iti vyañjitaḥ / (天界から落ちるのがふさわしい者は、顔を下ににする。従って、これによってこの者は完成者であることが明らかにされている) Cn. adhaḥ kāyāt ūrdhvaṃ vaktraṃ yasya, sūrye dattadṛṣṭir ataḥ svadehasyādhobhāgaṃ na paśyatiṭy arthaḥ / (体を下にするために顔を上ににする者は、すなわち、太陽に視線を向ける者は、このために自分の体の下方を見ない、という意味である)

⁵P. samabhivāhyate B. samabhirajyate K. samativāhyate

- (21) 「おお、ヴェーダ読誦に喜ぶ再生族における意識の集中 (buddhisamādhānam) は素晴らしい。彼は、短時間で、月のように空 (全体) を行くでしょう。彼は、父への従順によって、最高の完成に¹達したのです。
- (22) 父に信頼をおき、確固とした苦行を行い、父によって大変愛された息子を、他の者に心を向けない (ananyamanasā) 父が、どうして手放すでしょうか。」
- (23) ウルヴァシーの言葉を聞いて、最高のダルマを知るシュカは、その言葉に心奪われ、あたり一面を見た。
- (24) 彼は、虚空を、そして山・森・林のある大地を、それから、もろもろの湖、もろもろの川を見た。
- (25) するとあらゆる神々は、高い評判の²ドヴァイパーヤナの息子を、合掌して、見つめた。
- (26) その時、最高のダルマを知るシュカは、彼らに言葉を語った。「もし父が『シュカよ』と叫びながら、私を追いかけて来たならば、
- (27) その時には、すべての者たちは心を合わせて (sarvair eva samāhitaiḥ) 返答して下さい。このように皆、私への愛情から言葉を発して下さい。」
- (28) シュカの言葉を聞いて、森や林と共に³もろもろの方位は、そして、もろもろの海や川、山々は、あらゆる方角から、彼に答えた。
- (29) 「あなたの仰せのとおり、パラモンよ。確かにそのようにいたしましょう。聖仙が話しかけてきたならば、私たちは返答しましょう⁴。」

[320 章] (B.333 章, C.12608-12649, K.341 章) シュカの生涯 (12) 身体離脱と最高天到達
 ビーシュマは言った。

- (1) このように (山々などに) 語って、大苦行に富む梵仙シュカは、四種の世界を⁵捨てて、完成に達した。

¹P. kailāsapṛṣṭham vipulam siddhasaṃghaniṣevitam / siddhiṃ B.,K.: buddhiṃ

²P. bahumānapuraḥsaram B.,K.: bahumānāt samantataḥ

³P. savanakānanāḥ B. sarvāḥ sakānanāḥ K. sajalakānanāḥ

⁴prativakṣyāmahe Ca. prativakṣyāmahe, śuko 'nena panthā gata iti / (シュカはこの道を通って行った、と返答しましょう)

⁵P. lokāṃś caturvidhān B.,K.: doṣāṃś caturvidhān Ca. lokāṃś caturvidhān, jarāyujāṇḍajasvedajodbhijjān / (lokāṃś caturvidhān とは、胎生・卵生・汗生・芽生 (の世界) を、という意味である) Cf. Hopkins [Great Epic]: one abandons fourfold faults, eightfold *tamas* and fivefold *rajas*, p119.18; Hopkins [1901]: four kinds of faults, p.361.18.

- (2) 彼は、八種のタマス (tamas 暗闇) を¹捨て、五種のラジャス (rajas 埃) も²捨てた。それから思慮あるシュカは、サットヴァ (sattva 心) を³捨てた。それは奇跡のようであった⁴。(Cf.Sāṃkhya-Kārikā 48, 八種のタマス)
- (3) それから彼は、永遠にしてグナなく (nirguṇa) 徴表なき境地、すなわちブラフマンに、煙なき火のごとく輝きつつ⁵、留まった。
- (4) その瞬間に、もろもろの流星の落下、諸方位の火事、もろもろの地震が起こった。それは奇跡のようであった⁶。
- (5) 木々は枝々を投げ、山々は頂上を投げた。旋風の音によって、雪ある山は砕かれるかのごとくであった⁷。
- (6) 太陽は輝くことなく、火は燃えなかった。そしてもろもろの湖や川や海はすべて波立った。
- (7) ヴァーサヴァ (インドラ神) は風味のある (rasavat) よき香りの水を降らした。天の香りを運ぶ清浄な風も吹いた。

¹tamo hy aṣṭavidhaṃ Ca. aṣṭavidhaṃ, prakṛtir mahān ahaṃkāraḥ pañcabhūtānīty aṣṭau / teṣu ahaṃkāras tamovikāraḥ / (aṣṭavidham(八種) とは、根本原質、大、自我意識、五元素である。これらのうち自我意識はタマスの変異である)

Cn. aṣṭavidhaṃ, puryaṣṭakaparakāraṃ tamaḥ / (aṣṭavidham とは、すなわち、八都城の要素である tamas を、という意味である。

Cp. aṣṭasu, avyaktamahadahamkārapañcatanmātreṣv anātmav aṣṭabuddhirūpaṃ aṣṭaiśvaryaṛūpaṃ vā / (aṣṭasu, すなわち、未顕現・大・自我意識・五唯において、すなわち、アートマンでないものたちにおいて、アートマンを認識するという形の、あるいは、八種の自在という形の (八種のタマスを)、という意味である)

Cs. aṇimādyasṭasiddhīnām viparyayāḥ / ((八種のタマスとは) 極小となることなど八種の超能力 (siddhi) の反対のものである)

²pañcavidhaṃ rajaḥ Ca. pañcavidhaṃ rajaḥ, śabdādiviṣayapañcakarāgo rajasah pañcavidhyam / (音声などの五種の対象への執着が、ラジャスの五種である)

Cn. pañcavidhaṃ, viṣayapañcake vartakaṃ vāsanāmayaṃ rajaḥ / navaguṇaṃ raja itī pāthe —atyāgitvam akārpaṇyaṃ sukhaduḥkhopasevanam / bhedaḥ parūṣatā caiva kāmaḥ krodhas tathaiva ca / darpo dveṣo 'tivādaś ca ete proktā rajoguṇāḥ / ((pañcavidham (五種) とは、五種の対象に働く、潜在力からなるラジャスを、という意味である。「九種のラジャス」という読みにおいては、不放棄性、不遜、快苦への耽溺、不和、粗暴、欲望、怒り、傲慢、嫌悪、暴言、これらがラジャスの性質であると言われる)

Cs. pañcaguṇaṃ, duḥkhaceṣṭākāmakrodhadarpaṇaṃ / (pañcaguṇam 五種類とは、苦・行動・欲望・怒り・傲慢という種類である)

³sattvaṃ Cn. sattvam, buddhisattvena sarvaṃ saṃtyajya sattvam api tyaktam yena tyajasi tat tyajeti nāradopadiṣṭatvāt / (認識の心 (buddhisattva) によって一切を捨てた後、心 (sattva) もまた捨てるべきである。「それによって汝が捨てるものを捨てよ」というナーラダの教示のゆえに) (Cf.MBh.XII.316.30, 318.44)

⁴tad adbhubatam ivābhavat Cs. tad dhi duḥkhāt tyajyate, sanakādibhir api yogeśvaraīḥ / śukas tad api jahau / tad adbhubatam ivābhavat ity arthaḥ / (それは、サナカなどヨーガの自在者たちによっても、苦のゆえに捨てられる。シュカはそれも捨てた。それはそれは奇跡のようであった、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: *tad adbhubatam iva 'bhavat*, Parallel Phrases in the Two Epics, No.83, p.413.17.

⁵vidhūmo 'gnir iva jalan Cf.Hopkins[Great Epic]: *vidhūmo 'gnir iva jvalan*, Parallel Phrases in the Two Epics, No.256, p.435.6.

⁶tad adbhubatam ivābhavat Cf.Hopkins[Great Epic]: *tad adbhubatam iva 'bhavat*, Parallel Phrases in the Two Epics, No.83, p.413.17.

⁷P.,B.: girir himavān dīryatīva ha K. gurubhir bhūmir vyādīryateva ha

- (8) 彼は¹、ヒマラヤ山とメール山にある、金と銀からなる白色と黄色の、並ぶものなき、神聖にして清浄な、密接している二つの山頂を²、
- (9) 水平と上方に百ヨーjanyaの広さをもつ³輝く二つの山頂を、北方に行って見たのである、パーラタ族よ。
- (10) シュカは、心ためらうことなく、飛んで行った。すると二つの山頂は、突然、二つに引き裂かれるのが見られた。偉大な王よ、それは奇跡のようであった⁴。
- (11) それから、(シュカは) その瞬間に、二つの山頂の間を通り抜けた。この最高の山は、彼が進むの妨げなかったのである。
- (12) すると、あらゆる神々の、ガンダルヴァたちの、聖仙たちの、山に住む者の、大きな声が天に生じた。
- (13) シュカが二つに裂けた山を越えたのを見て、「善きかな」「善きかな」という喚声はその時あらゆるところで起こったのである、パーラタ族よ。
- (14) シュカは、神々、ガンダルヴァたち、聖仙たち、夜叉と羅刹の群、そして、持明神 (vidyādhara) の群によって、礼拝された。
- (15) シュカの飛行中、その時、虚空は天の花々によって完全に覆われたのである、偉大な王よ。
- (16) ダルマを本性とするシュカは、それから、美しい天のガンジス川を上方から通り過ぎつつ、花の咲いた樹木の森を見た。
- (17) その川の中で、アプサラスの群が、楽しそうに遊び、水浴びをしていた⁵。衣服を脱いで姿のないアプサラスたちは、姿のないシュカを見ても (dr̥ṣṭvā)(恥じらいはなかった?)⁶。
- (18) 一方、愛情ある父は、シュカが飛行しているのを知って、北の道をとって、後ろから追いかけた。

¹sa Cs. sa śukaḥ śr̥ṅge saṃdadar̥śety upari saṃbandhaḥ / (sa, すなわち、シュカは、二つの山頂を見た (第9詩節 d), というように後と繋がっている)

²saṃśliṣṭe śvetapite dve rukmarūpyamaye śubhe Cf.Hopkins[1910]: two united peaks form simple edges, which would be indistinguishable were it not that one peak is golden and the other (snowy or) silvery, p.372.33.

³śatayojanavistāre tiryag ūrdhvaṃ ca Cf.Hopkins[1902]: two dimensions may follow adverbially, p.153.25.

⁴Cf.Hopkins[Great Epic]: tad adbhutam iva 'bhavat, Parallel Phrases in the Two Epics, No.83, p.413.17.

⁵P.K.: snānti caivāpsarogaṇāḥ B. te caivāpsāṃ gaṇāḥ

⁶śūnyākāraṃ nirākārāḥ śukaṃ dr̥ṣṭvā dr̥ṣṭvā のあとに続く動詞あるいは動詞的要素がない。 Ganguli: Beholding Suka who was bodiless, those unclad aerial beings felt shame. (p.113.5) Deussen: welche nackt und unkörperlich auf den körperlosen Śuka hinblickten. (p.745, v.18)

- (19) シュカは、風よりも高い虚空を行く道をとって、自らの威力を示して、遍在者となった¹。
- (20) しかし大苦行のヴィヤーサは、最上の偉大なヨーガの道に立って²、一瞬の間に³、シュカの飛行したところに行った。
- (21) 彼は、シュカが山頂を二つに裂いて通ったのを見た。その時、聖仙たちは、彼のために息子のその行為を賞賛した。
- (22) そこでその時、「シュカー」と正しい長音で叫んだ⁴。父自らによって発された大音声は三界に響いた (anunādyā)。
- (23) シュカは、一切に遍在する者となって、一切を本性とし、あらゆる方向に顔を向けていた。ダルマを本性とするシュカは、「はい (bhoh)」という音声によって、(音を) 反響させつつ⁵、答えた。
- (24) それから、動くもの動かぬものからなる全世界は、単音節の響きを「ボー」と発声して、大声で答えた。
- (25) それ以来、今日でも山の洞穴や頂上で発せられたもろもろの音声に対し、それぞれ、シュカに対して答えた (ように答えるのである)。(Cf.Hopkins[1910]: Mountains speak as an echo, p.357.29)
- (26) シュカは、姿を隠しつつも、(ヨーガの) 超自然力を (prabhāvam) 示して、音声などの諸属性 (guṇān) を捨て、最高の境地に達した。
- (27) (ヴィヤーサは) 無量の活力をもつ息子の威力を見て、息子のみを思いつつ、山中の平地に座った。
- (28) すると、マンダーキーニ川の岸で、戯れていたアプサラスたちの群は、その聖仙を見て、みな戸惑い、茫然とした (gatacetasah)。
- (29) この最高の聖者を見て、ある者たちは水にもぐり、ある者たちは藪に入り、ある者たちは着物を着た。

¹P.,K.: sarvabhūto bhavat B. brahmabhūto bhavat

²vyāsothāya Sandhi irregular: vyāsothāya (< vyāsa utthāya) Cf.Oberlies[Grammar]: double sandhi, p.38.9.

³nimeśāntaramātreṇa Cf.Hopkins[Great Epic]: nimeśāntaramātreṇa, Parallel Phrases in the Two Epics, No.138, p.420.38.

⁴P. dīrghena śakṣeṇākranditas B., K.: dīrghena śabdenākranditas Cn. śukā 3 iti dūrād dhūte plutiḥ / aplutavad upasthite (Pāṇ 6.1.129) ity aplutavadbhāvān na prakṛtibhāvah / (「シュカーー」)と長音で発せられる場合、三短音節分の長さがある。「(長音化された語が)iti と共に用いられた場合、長音化されていないかのように扱われる」(Pāṇini 6.1.129) という規則によって、長音化されていない状態であるから、語本来の状態ではない)

⁵bhoḥśabdenānunādayan Ca. sa nabhaḥśabdenānunādayan pratyāha / (空中の音声によって反響させつつ答えた、という意味である) Hopkins[Great Epic]: echo arose from the care with which Śuka addressed his superior Vyāsa with *bho bho*, p.26, fn.1.

- (30) 聖者は、その時、息子が解脱したことで、自分に執着があることを知って、喜ぶと共に恥じた。
- (31) 彼に、神とガンダルヴァに囲まれ、聖仙の群に礼拝され、ピナーカ杖を手にした、聖なるシヴァ神が近づいた。
- (32) その時マハーデーヴァは、息子への憂いに苦しむクリシュナ・ドヴァイパーヤナに、慰めのために次の言葉を語った。
- (33) 「火の、地の、水たちの、風の、虚空の力に匹敵する息子を、かつて汝は余から求めた。
- (34) 彼は、そのような特徴をもって生まれた。彼は、汝の苦行と、余の威光によって (prabhāvena) 包まれた、ブラフマンの力からなる清浄な者となった。
- (35) 彼は、感官の制御なき者たちはもちろん、神々によってさえ到達しがたい最高の境地に達した。梵仙よ、その彼を汝はなぜ嘆くのか。
- (36) 山々がある限り、もろもろの海がある限り¹、汝の名声は、息子とともに不滅であろう。
- (37) 余の恩寵によって、汝はこの世界で、いつも決して汝から離れない汝の息子によく似た影像 (chāyā) を見るであろう、偉大な聖者よ。」
- (38) かの聖者は、おのずから、聖なるルドラによって慰められ、影像を見つつ、最高の喜びと共に帰ったのである。
- (39) 以上のように、汝が私に尋ねた²シュカの誕生と行いを私は詳細に述べた、パーラタ族の雄牛よ。
- (40) このように、王よ、かつて神仙ナーラダが、そして偉大なヨーガ行者³ヴィヤーサが、話しのたびに⁴、私に語ったのである。
- (41) 解脱の法の目的に言及した、このよき話を⁵保持し、寂静を専らとする者は、最高の道を行くであろう。

¹yāvat sthāsyanti girayo Cf.Hopkins[Great Epic]: yāvat sthāsyanti girayo, adding yāvat sthāsyanti sāgarāḥ, Parallel Phrases in the Two Epics, No.222, p.430.35.

²yan mām tvaṃ pariprcchasi Cf.Hopkins[Great Epic]: etat te kathitaṃ sarvam, preceded by yan mām tvaṃ pariprcchasi, Parallel Phrases in the Two Epics, No.29, p.406.29.

³mahāyogī Cf.Hopkins[1901]: mahāyogin, not one who hasmahāyoga but a “great Yogin”, p.365.12.

⁴saṃjalpeṣu pade pade Cs. pade pade, pratikṣaṇam / (pade pade とは、あらゆる場合に、という意味である)

⁵P.,K.: itihāsam imaṃ puṇyaṃ mokṣadharmārthasaṃhitam B. itihāsam imaṃ puṇyaṃ mokṣadharmopasaṃhitam Cf.Hopkins[Great Epic]: itihāsa, a philosophical discourse of religious content (mokṣadharmā), p.51, fn.1.